兼好と往生譚

稲田利徳

はじめに

斎藤清衛氏は『徒然草』（アテネ文庫・昭29刊）のなかで、「兼好は、阿弥陀経にある圓満無欠で自由安楽な極楽世界の如きが人間の來世に客観的にあるとは信じていなかったようである。その點、兼好の極樂観ははっきりしないが、色々の態度からこの娑婆（現世）の中に、寂光土があることを信じていたものらしい。」と述べておられるが、この見解は、出家遁世者兼好の筆になる「徒然草」の側面を映し出す、注意すべき発言である。

「徒然草」を「後世」の観点からみると、先のような意見をいだくのは、なにも斎藤氏一人に限ったわけではなく、多くの研究者が直感しているもので、近くは三木紀人氏も「徒然草」の三十段に触れ、「知られるように、この時代は「極楽往生」などの用語に示されるような死後への幻想が支配的であった。わけても遁世者の世界においてそうであったが、兼好の死生観には、そのような空気を生きる者らしいところは希薄である。この段からも無に始まって無に帰って行く人間存在への諦観にはほど遠い悲しみの情は感じられるが、それを通用の思想によって納得しようとする志向は見られない。」（『徒然草』㈠全訳注、講談社学術文庫・昭54刊）とされる。

私もこれらの意見を首肯するものであるが、その背景をさぐることは、案外「徒然草」というユニークな作品を醸成させた源泉をくみあげることになるかもしれない。

以下、「徒然草」を「後世」の立場から眺め、兼好の往生観や往生譚に対する思念をたどってみたい。

一

「徒然草」を繙いてみて、まず不審に思うのは、出家遁世者が「つれ〴〵なるままに」書き記したものにしては、「往生」という用語の使用が少ないということである。

当時の遁世者や僧侶にとって、来世の極楽往生ということは重大な関心事であったはずだからである。

しかるに、「徒然草」には、次の二段に「往生」なる用語がでてくるにすぎない。

或人、法然上人に、「念佛の時、睡におかされて行を怠り侍る事、いかゞしてこの障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒

めたらんほど、念佛し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。　（第三十九段）

老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。（中略）人はたゞ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。さらば、などか、この世の濁りも薄く、佛道を勤むる心もまめやかならざらん。

「昔ありける聖は、人來りて自他の要事をいふ時、答へて云はく「今、火急の事ありて、既に朝夕に迫れり」とて、耳をふたぎて念佛して、つひに往生を遂げけり」と、禪林の十因に侍り。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなる事を思ひて、静かについゐけることだになく、常はうずくまりてのみぞありける。　（第四十九段）

しかし、ここで留意すべきは、両段ともに、「往生」という用語を兼好自身が積極的に使用しているのではなく、第三十九段の場合は法然上人の会話の中、第四十九段では「禪林の十因」（往生拾因）の引用だということである。

従って、兼好は往生という用語を「徒然草」で一度も使用していないことになる。ないということは、多く存在することとともに、見逃し得ない現象である。

しかも、先の両段も、筆者が「往生」そのものに、深い感動を催して引用したものとは思えない。第三十九段で「尊し」と感嘆しているのは、法然上人の、念仏に対する疑う余地のない信念の披瀝に対してであろう。また、第四十九段は、「往生拾因」[注1]の

伝聞、有聖。念仏名業。専惜寸分。若人来謂自他要事。聖人陳曰。今有火急事。既逼於日暮。塞耳念仏。終得往生。

によるものであるが、「往生拾因」が、あくまで往生を遂げたことに主眼があるのに対し、「徒然草」では、常に無常が我が身に迫ってくることを片時も忘れなかった人物への感嘆となっている。

以上のように、「徒然草」による限り、兼好が「往生」ということに、深い関心をもっていた形跡は希薄であったように臆測されるのである。

このことは、「往生」と相即する「念佛」なる用語をとりあげてみても同様である。

「念佛」なる用語は、先に引用した、三十九段、四十九段にもみえるが、ともに兼好の言説中に使用したものではなかった。他には、百十五段の「宿河原といふところにて、ぼろ〳〵多く集まりて、九品の念佛を申しけるに」や、二百二十二段の「弟子ども、『いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛に勝る事候ふまじとは、など申し給はぬぞ』と申しければ」にみえるが、これらも、兼好が直接使用して、念仏に価値を付与したものではない。ただ、百二十四段の、

是法々師は、浄土宗に恥ぢずといへども、學匠を立てず、ただ明暮念佛して、やすらかに世をおくる是法々師に対し、「いとあらまほし」と評言しているところからみて「念佛」にも多少の思い入れがあったとみられるが、ここもまた、是法々師への尊崇の念が中心であるとみてよい。

「徒然草」のいたるところに、一日も早く所縁放下を述べた兼好ではあるが、以上の考察からすると、念仏をとなえて極楽往生すべきことを主張した章段は、遂にみあたらないことになる。

斎藤氏が、先述したように、兼好は来世において極楽世界のごときものが客観的に存在するとは信じていなかったとされたのは、以上の考察からも納得できるのである。

二

兼好が、当時盛行していた往生譚に対して、どのような思いで接していたかを知る有力な手がかりが、第百四十三段にある。

人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、たゞ、閑にして乱れずといはば心にくかるべきを、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ、いひし言葉も、ふるまひも、己が好む方にほめなすこそ、その人の日来の本意にもあらずやと覚ゆれ。

この大事は、權化の人も定むべからず。博學の士も計るべからず。己たがふ所なくは、人の見聞くにはよるべからず。

この段は人の臨終の有様を問題にしており、しかも「人の話を聞くに」とあるので、兼好と同世代の人の死にぎわの「異なる相」を直接問題にしていると考えられるが、もっと広く、中世に盛行した、仏教説話の往生譚とよばれるものを背景にして読むべきであろう。

僧侶であった兼好は往生譚に多く目を通していたはずである(「徒然草」には「往生拾因」だけしかでてこないが)。例えば「日本往生極楽記」「拾遺往生伝」「続本朝往生伝」「大日本國法華経験記」などをひとわたり目を通してみると、そこには「人の終焉の有様」の異相がおびただしくでてくる。

これらの往生譚には、前もって死期をさとるとか、臨終に際して、香気が漂い、音楽が流れ、紫雲がたなびき、死体が変化しないことなどが、往生の類型的現象としておびただしく集録されている。兼好が確実に目を通していた「往生拾因」にも、次のようにみえる。

楽音髣髴。異香具芬。聖人合音念仏。聞者歓喜不少。光明忽照。紫雲満空。上人向西結印端座入滅。時八十七。

これらの往生の異相は、仏教説話集に限らず、「古今著聞集」のような説話集にもみえる。例えば、源空上人の往生のとき。今まで見えなかった目や聞えなかった耳も機能をはたすようになり、しかも「念佛音聲とゞまりて後も、なを唇舌を動かす事一餘反ばかり也」(巻二・六三話)とか、大御室性信が往生のときは「紫雲をばまさしくみられけるとぞ。延暦寺僧慶學は空中に音樂をきゝけり。荼毗のとき御平生の間とかせたまはざりける御帯、棺の中にて焼ざりけり。不思議の事とぞ世の人申ける。」(巻二・五〇話)

これに類した説話は枚挙にいとまがない。

兼好が先のように、「閑にして乱れずといはば心にくかるべきを、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ」と指摘しているのは、かかる往生譚にみられるような、尾鰭を付けた、あやしき異相をまことしやかに語る人を批判したと考えられる。

このように、あやしき異相をまじえた往生譚に懐疑と批判をいだいていた兼好ではあったが、やはり、人間の臨終の有様は、彼にと

っても重大関心事であり、「閑にして乱れず」という態度が理想であった。「山家集」[注2]に、

同行に侍ける上人、をはりよく思さまなりときゝて申を　寂然

みだれずとをはりきくこそうれしけれさてもわかれはなぐさまねども　（八〇五）

かへし

この世にてまたあふまじきかなしさにすゝめし人ぞ心みだれし　（八〇六）

とあるのは、先の百四十三段の「たゞ、閑にして乱れずといはば心にくかるべきを」と照応し、兼好にとっても「心にくい」臨終の有様として受けとれたであろう。

また、「徒然草」（二百十五段・二百十六段）に登場し、尊敬の念で描かれていた北条時頼の最後は「吾妻鏡」（弘長三年十一月二十二日の条）によると、

時頼、於最明寺北亭、卒去。御臨終之儀、着衣袈裟、上縄床、令坐禅給。聊無勤揺之気。頌云……口唱頌而現即身成仏瑞相。本自権化再来也云々。

と記されているが、兼好に言わせれば、「聊無勤揺之気」で十分であり、それ以下のことは余計なものであったろう。

ところで、先に触れた「終焉の有様」（第百四十三段）と関連してくる段に、虚言に考察を加えた、第七十三段があり、次のように微妙に脈絡をもってくる。

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆虚言なり。あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして、年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきまゝに語りなして、筆にも書き止めぬれば、やがて定まりぬ。（中略）

とにもかくにも、虚言多き世なり。たゞ、常にある、珍らしからぬ事のまゝに心得たらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚く事のみあり。よき人はあやしき事を語らず。

かくは言へど、仏神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、「よもあらじ」など言ふも詮なければ、大方は誠しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

前半のところは、事実に尾鰭を付けて言った虚言が、やがて書物に記されて定着する様を述べているが「終焉の有様」の「あやしく異なる相」を語りつけるのと当然かかわってくる。

しかし、ここで改めて注目されるのは、「とにもかくにも、虚言多き世なり」と断定したとき、兼好の脳裡に浮んだのは「佛神の奇特」や「權者の傳記」に対する態度である。

「たゞ常にある、珍らしからぬ事のまゝに心得たらん、よろづ違ふべからず」と主張する兼好である。信じられないような不思議な事象が書きとどめられている、神仏の奇特や権者の伝記を、この主張の郭内にとりこむかいなかは、僧侶である兼好にとって、大きな問題であった。そこでわりだしたのが、「さのみ信ぜざるべきにもあらず」「大方は誠しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず」という、きわめて曖昧で微妙な接し方であった。

なぜ、このような曖昧な発言をしたのか。

おそらく、冷静な兼好は、心底では仏神の奇特や権者の伝記をそ

のまま信じていなかったものの、それを筆にとめることは、僧侶として、罰あたり的な態度になると思ったからではなかろうか。仏神の奇特や権者の伝記といったとき、兼好はそこに往生譚をも重ねていたかどうかは判然としないが、ともかく、この段からも、往生譚に懐疑の目を向けていたことは想定されるといえよう。

ところで、以上は「徒然草」に照明をあてたときの、兼好の往生譚との接し方であったが、次に「兼好自撰家集」[注3]の方に目を転じて、往生関係の歌をさがすと、注意すべき、次のような歌が存在する。

ごくらくに往生すべき事などとくをきゝて

ふねしあればちびきのいしもうかぶてふちかひのうみに浪たつなゆめ　（一四三）

春のころ、哀傷

かへりこぬわかれをさてもなげくかな西にとかつはいのる物から　（二八六）

前者は、極楽に往生すべきことを聴聞したときの歌であるが、「法華経」普門品の「弘誓深如海、歴劫不思議」を念頭におき、舟があれば千人でひくような石も浮かぶというごとく、弘誓の舟があれば、すべての人が救済されるという仏の誓言にゆめゆめ動きあるなと願っている。「ちかひのうみに浪たつなゆめ」と詠じている背後には、極楽往生という現象に対して危倶の念がほのみえている。

同様に後者の歌も「西にとかつはいのる物から」と西方極楽往生を心の隅で祈りながらも、やはり「かへりこぬわかれを」悲しむというように、現世での悲哀を重視している。

これらの態度には、「知性が信仰に優位している一面」「信仰者としての心のあり方の不徹底さ」[注4]が察せられるのである。

このように「徒然草」「兼好自撰家集」を通して、兼好が来世の極楽往生の世界の存在を信じきっている気配がうすいこと、従って、当時、盛行していた往生譚に対しても、かなりひややかな態度で接していたであろうことが臆測できる。

三

兼好が往生譚に対して、どれほどの関心を示していたかを推測するてだての一つとして、「一言芳談」に触れた、第九十八段の検討がある。

尊きひじりの云ひ置きける事を書き付けて、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍りしに、心にあひて覚えし事ども。

一、しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうは、せぬはよきなり。

一、後世を思はん者は、糟汰瓶一つも持つまじきことなり。持経・本尊に至るまで、よき物を持つ、よしなき事なり。

一、遁世者は、なきにことかけぬやうを計ひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一、上蔬は下蔬になり、智者は愚者になり、徳人は貧に成り、能ある人は無能になるべきなり。

一、仏道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけぬを、第一の道とす。

この外もありし事ども、覚えず。

この五か条は、兼好が「一言芳談」を読み、なるほどと同感して印

象に残ったものであるが、原文の語句をそのまま引用したものではなく、一度、兼好の脳裡を通過した、記憶にもとづくものである。従って、それを原文と比較すれば、種々な問題も派生してくる。

この五か条の「一言芳談」[注5]の原文を示せば、各々、次のようである。

○又云「しやせまし、せでやあらましとおぼゆるほどの事は、大抵せぬがよきなり」。

○俊乗房の云「後世をおもはんものは、糒粧瓶一ももつまじき物とこそ心えて候へ」。

○解脱上人云「出離に三障あり。一には所持の愛物、本尊持経等まで。二には身命を惜しむ。三には善知識の教へにしたがはざる」。

○又云「遁世者は、なに事もなきに事闕ぬ様をおもひつけ、ふるまひつけたるがよきなり」。

○又云「むかしは後世をおもふ者は、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧人に成、能あるものは無能にこそ成しか」。

○又云「たゞ佛道をねがふといふは、別にやう〳〵しき事なし。ひまある身となりて、道をさきとして、餘事に心をかけぬを第一の道とす」。

まず、第一条から検討してみる。

この条は普通「する事にしようか、あるいは、しないですませようかと思い迷う事は、大概は、しないのがよいの意」[注6]に解されているが、桑原博史氏は「このことばは、一見、しようかしまいか迷いのあることはしない方がよいという、消極的な生き方をすすめているかのようであるが、そうではあるまい。迷いのある事柄は、たいていしない方がよいことが多いということで、迷いの対象となるものが、人間の欲望から生ずるものであることを説明しているのである」[注7]と通解を批判されている。

それはともかく、「一言芳談」の原文と比較してみると、「しやせまし、せでやあらましとおぼゆるほどの事は」の傍点部分が、「徒然草」では「思ふ事は」と相違する。この相違は、これまでの諸注釈書が触れていないところであるが、「ほど」の有無は重要である。即ち、「一言芳談」に即すれば、「しようかしまいかと迷う程度のことは」と迷いの対象の価値を問題にしているともとれるからである（その背後に、念仏をとなえ、仏道にはげめという心がある）。

第二条は「一言芳談」の二つの条を一つにしている。第三条とともに、遁世者は無一物を理想とすべきであることに共感している。第四条では原文にある「むかしは後世をおもふ者は」を欠落させ、いきなり「上臈は下臈になり」とする。「一言芳談」で「後世をおもふ者」と限定しているのに、その枠をとりはらい、人間一般に敷衍している。また最後の五条も、原文にある「道をさきとして」を欠落させ、「餘事」を「世の事」にとっている。

以上、「一言芳談」で兼好が共感した条に検討を加えてきたが、その引用にあたっても、「後世をおもふ者」とか「道をさきとして」などを欠落させていることがつきとめられた。

これは要するに、仏道とか後世にあまり問題を求めていないことを裏面から証している。

兼好がもし、往生や念仏に非常な関心をいだいていたとすれば、「一言芳談」にある、

○有云、「蓮阿彌陀佛が夢に、八幡宮つげてのたまはく、「往生は一念にもよらず。心によるなり」
○有云、「往生をおもはん事、たとへばねらひづきせんとする心ねをもつべし」
○又云「煩悩のうすくあつきをもかへり見ず、罪障のかろきおもきをも沙汰せず、たゞ口に南無あみだ佛ととなへて、聲につきて、決定往生をなすべし」
などと、随所にでてくる往生を問題とする条や、あるいは、
○明禅法印云、「たゞよく念佛すべし。石に水をかくるやうなれども、申ば益あるなり」
○或人たづね申て云、「非人法師は、いかなる所にか住すべく候らん」仰云、「念仏だに申されば、いかなる所にてもありなん。念仏のさはりとならん所ぞ、あしかるべき。但、境界をばはなるべきなり」
といった「念佛」を勧める条を記憶にとどめてもよいはずである。
このように「一言芳談」に共感をおぼえた条々の検討からも、兼好が、後世や往生に対して、それほど関心を示していないことが臆測されるであろう。

四

これまでの考察で、「徒然草」による限り、兼好は、後世や往生への関心が希薄であること、また、念仏することをすすめた形跡もないことなどが明らかになった。
しかし、この態度が、そのまま兼好の出家当初からの一貫したものであったかどうかは問題である。
「兼好自撰家集」をみると、

ほうりむにこもりたるころ人のとひきてかへりなむとするにもろともにきくだにさびし思ひをけかへらむあとのみねの松かぜ　（一七）

修学院といふところにこもり侍しころ

のがれてもしばのかりほのかりの世にいまいくほどかのどけかるべき　（五二）

のがれこし身にぞしらるゝうき世にも心にものゝかなふためしは身をかくすうきよのほかはなけれどものがれしものは心なりけり　（五三）

いかにしてなぐさむ物ぞよの中にそむかですぐす人にとはゞや　（五四）

（五五）

のように、法輪寺や修学院に参籠している兼好の姿がとらえられる。これら一連の参籠の時期は、歌の内容からみて、出家当初のころであろう。また、

山寺に念仏してゐたるに、みやこよりたづねくる人の中に、わかきおとこのいとねんごろに物がたりして、かゝるすまゐはいとたづきなしや、なに事かしのびがたきなどゝふは、おもふ心ありてやとみゆるもあはれにて

山ざとにとひくるともゝわきて猶心をとむる人は見えけり　（二三二）

と、念仏に専心している姿をみてとることもできる。

よ河にすみ侍しころ、霊山院にて、生身供の式をかき侍しおく

にかきつく
うかぶべきたよりとをなれ水ぐきのあとゝふ人もなき世なりとも　（六三）

この横河在住の折の「生身供の式」に対し、兼好の出家の時期を、応長ー正和二年にもとめられる、林瑞栄氏は「兼好の生涯のうち、横川における生活ほどの『出家』生活、すなわち空間的にも質的にも世俗を遠く離れた生活がまたとほかにあったろうか」[注8]と真摯な信仰生活を指摘されている。

この他に「家集」には、「いし山にまうづとて、あけぼのにあふさかをこえしに」（二）とか「神な月のころ、はつせにまうで侍しに」（一〇六）と寺々に参詣している詞書がみえる。

兼好の出家の原因は、

さだめがたくおもひみだるゝことのおほきを
あらましも昨日にけふはかはるかなおもひさだめぬ世にしすまへば　（四九）

ともすればにほのうきすのうきながらみがくれはてぬよをなげく哉　（五〇）

の歌などからみても、現世において、種々な苦悶に遭遇したことにもとめられるであろうが、先の寺々に参籠して念仏に専心していたのは出家当初のことであろう。このような信仰生活の痛切な体験を通過したあとで、「徒然草」は執筆されたと思われる。「徒然草」で、

後の世の事、心に忘れず、佛の道うとからぬ、こころにくし。　（四段）

寺・社などに、しのびてこもりたるもをかし。　（十五段）

山寺にかきこもりて、佛に仕うまつるこそ、つれ〴〵もなく、心の濁りも清まる心地すれ。　（十七段）

と記しているのは、先述したような実体験を背景にしているのであろうが、参籠を「こころにくし」「をかし」「心の濁りも清まる心地すれ」と、厳しい仏道修業としてではなく情趣的に述べているのは注意されるし、また、これらの章段が、「徒然草」のはじめの方に集中するのも注目すべきことであろう。

おそらく出家当初、兼好は寺社に参籠し、念仏三昧の信仰生活をおくっていたと思われる。そういった生活のなかで、彼は、後世とか往生といった世界を鋭い思念をもって探究したと想像される。そして、兼好の冷静な目は、後世における極楽往生の世界の存在にも懐疑をいだくようになったのではなかろうか。

「徒然草」に往生譚への関心や念仏三昧の仏道修行をすすめる章段がほとんどないのは、出家した当初からの一貫した態度というよりも、「家集」にみえたような、真摯で厳しい信仰生活を経たあとに、たどりついたものであったと考えられる。

五

「徒然草」には説話的章段がきわめて多いし、往生伝にしばしば登場する、増賀（一段）、顕基中納言（五段）、書写の証空上人（六十九段）などの人物もとりあげられているにもかかわらず、往生譚の方向から描写されることはない。

そして、兼好の冷静な目は、後世に極楽世界のようなものが客観的に存在することに懐疑をもっていた。往生譚にしばしばみえる、

念仏の功徳による奇瑞をとこうとするあまり、不思議なこと、絵空ごとを捏造したものにも反発を示していたようである。

兼好にとって、より重大事は、往生の成否よりも、現世において生きている間をどう生きるかということであった。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のために言はば、一銭輕しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば、商人の一銭を惜しむ心、切なり。刹那覺えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、忽ちに至る。

されば、道人は、遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし。（第百八段）

ここに主張されている意見は、寸陰を惜しんで仏道にはげめというのではなく、ただ今の一念をむなしくすごしてはならぬということである。それには、

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。（第三十八段）

大かた、萬のしわざは止めて、暇あるこそ、めやすく、あらまほしけれ。（第百五十一段）

のごとき「閑かなる暇」をえた身になり、そこに自己充足を獲得する必要がある。

つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならん。まぎらゝかたなく、たゞひとりあるのみこそよけれ。（第七十五段）

この章段をはじめ、「兼好の隠遁の主題は、仏道にあったのではなく、『まぎらゝかたなく、たゞひとりある』個の充足を楽しむことにあった。[注9]」ことを示唆するところが多い。

兼好の往生譚に対する以上のような態度は、僧侶の綴ったものとは思えぬような「徒然草」というユニークな作品の出現を可能にした。

もし、兼好が来世や極楽往生に非常な関心をもっていたとすれば、おそらく、今日あるような「徒然草」は生まれなかったであろう。

久保田淳氏が「閑居友」に触れ、応報譚に限らず、これといった、おどろおどろしい往生譚も無い「閑居友」は、「発心集」「沙石集」はもとより、「撰集抄」ともちがった、仏教説話集としては、かなり特異な存在で、説話としての面白さに乏しいが、「徒然草」の内に「閑居友」に一脈通ずる物の見方や考え方が認められることは確かであるとされたのは、[注10]先述した点とも重なり注意される意見である。

おわりに

兼好が往生譚に対して、かなりひややかな、批判的な受けとりかたをしていたであろうことは、先の「徒然草」の分析から、ある程度確かめられた。が、この態度は、出家当初からの一貫したものというより、念仏修行を経たあとで到達した思念であったと臆測される。

彼にとって重要なことは、往生の成否よりも、現世における「只今の一念」をいかに充足して生きていくかということであった。

かかる精神が根底にあったればこそ、遁世者の手になった「徒然草」が、仏教くささの少ない、現実を熟視した、ユニークな内容を

たたえた作品になったのであろう。

この論考は、従来、直観的に言われてきた、兼好と後世観の問題を、「徒然草」や「兼好自撰家集」の分析を通して、筋道だてて確認するところにあったが、こういった問題意識をもって接するとき、「徒然草」は、新しい相貌をおびてくるだろう。

注1、藤原正義氏「翻刻・往生拾因」（北九州大学文学部紀要第23号、昭55・1）による。

注2、本文と歌番号は『私家集大成中世Ⅰ』による。濁点を施す。

注3、本文と歌番号は『私家集大成中世Ⅲ』により、濁点を施した。

注4、中川徳之助氏『兼好の人と思想』。

注5、日本古典文学大系『假名法語集』所収本による。

注6、安良岡康作氏『徒然草全注釈』。

注7、『徒然草の鑑賞と批評』。

注8、「続・横川と兼好―その信仰生活と現実」（山形女子短期大学紀要、第3集昭44・3）。

注9、伊藤博之氏「隠遁形式の発想」（解釈と鑑賞、昭52・4）。

注10、「怨み深き女生きながら鬼になる事―『閑居友』試論―」（『中世文学の世界』所収）。

―岡山大学助教授―